Vol.50

Vol.50（2012年 春号）

PMI 日本支部 ニューズレター

Column／海外カンファレンス参加報告 …… 3

Topics／トピックス …… 4

Best Practice and Competence／PM事例・知識 …… 5

Activities／支部活動 …… 22

PM Calendar／PMカレンダー …… 29

Fact Database／データベース …… 30

Editor's Note／編集後記 …… 33

PMI® JAPAN CHAPTER

目 次 >>

Column／海外カンファレンス参加報告 …… 3

- インド Pune Deccan Chapter インターナショナル・カンファレンスに参加して　PMI日本支部　理事　杉村 宗泰

Topics／トピックス

◆海外要人講演 …… 4

- ハロルド・カーズナー博士による特別講演　PMI日本支部　事務局

Best Practice and Competence／PM事例・知識

◆月例セミナー報告 …… 5

- PMI日本支部　12月度月例セミナー概要　PMI日本支部　セミナー委員会　成田　渉
- PMI日本支部　1月度月例セミナー概要　PMI日本支部　セミナー委員会　鬼束 孝則
- PMI日本支部　2月度月例セミナー概要　PMI日本支部　セミナー委員会　永井 みつる

◆第2回 *it*SMF Japan/PMI Japan共催シンポジウム …… 11

- シンポジウムの概要
- 基調講演　『サービス・マネジメントを構成するもの』　ボランティア記者　日本アイ・ビー・エム株式会社　高橋 正博
- ITIL®は運用部門だけのものではない！　ボランティア記者　MBPジャパン株式会社　高　士山
- PMI講演　『サービス開発だってプロジェクトだ！』　ボランティア記者　日本電気株式会社　植田 晃市
- パネル・ディスカッション　ボランティア記者　株式会社協和エクシオ　渡辺 健成

◆他国カンファレンス報告 …… 19

- Pune PMI Pune-Deccan Annual Project Management Conference2012参加報告　PMI日本支部　事務局　田中 洋一郎

Activities／支部活動

◆部会紹介 …… 22

- 新たな挑戦　「PMツール研究会」の発足　PMツール研究会　代表　村上 竜一
- 関西地区　関西地区運営委員長　浦田 有佳里

◆PMI本部CoP活動紹介 …… 27

- PMI®標準次期バージョン作成にむけての活動　PMI日本支部　理事　平石 謙治

PM Calendar／PMカレンダー …… 29

- PMI日本支部主催の直近の主なイベント

Fact Database／データベース …… 30

Editor's Note／編集後記 …… 33

◆商標等について
「PMI Project Management Institute」とそのロゴおよび「PMP」、「CAPM」、「PMBOK」、「OPM3」、「Quarter Globe Design」は、米国および他の国で登録されているプロジェクトマネジメント協会のマークであり商標です。プロジェクトマネジメント協会のマークの対象リストについては、プロジェクトマネジメント協会の法務部門へお問い合わせください。
「ITIL®（IT Infrastructure Library）」は、英国及び欧州連合各国における英国政府Cabinet Officeの商標又は登録商標です。

Column／海外カンファレンス参加報告

■インド Pune Deccan Chapter インターナショナル・カンファレンスに参加して

PMI日本支部　理事　杉村 宗泰

PMI日本支部は、インドのPune Deccan支部とプロジェクトマネジメント能力向上活動に対する相互協力についての姉妹支部契約を取り交わしており、人材の交流、講師の相互派遣等を行っています。これらの活動の一環として、去る2012年２月５日にインド国Pune市で開かれた、Pune Deccan India Chapter インターナショナル・カンファレンスに参加し、日本支部の取り組みについて紹介を行って来ました。

カンファレンスでは、大きく分けて１）東日本大震災復興におけるPMI日本支部の貢献、２）一般的なPMI日本支部の活動、の２点について紹介しましたが、東日本大震災への関心は特に高く、PMI日本支部が復興活動にどのように貢献しているのかについては良い意味で緊張感のある報告となりました。

東日本大震災復興に関わるPMI日本支部の貢献については、まず東日本大震災での被害の状況について、特に津波と原子力発電所に関係する被害の状況についてお話し、次にPMI日本支部が災害復興について貢献できる部分をどのように選定したのかについて説明し、最後に復興においてPMIが持つ資産をどのように活用したのかについて説明を行いました。貢献できる部分は、緊急度と重要度を用いたマトリックスを用いて選定を行ったこと、またPMIの持つ資産については、PMMPDR（Project Management Methodology for Post Disaster Reconstruction）を活用したことを説明しましたが、会場で参加いただいた参加者のみならず、ネットで参加いただいた方にも熱心に聞いていただくことができました。

私からの報告の他、カンファレンスではさまざまな報告や発表が行われ、活発な意見交換が行われていたのですが、一番特徴的なことは、当カンファレンスとは別日程、別会場で教育のセッションが行われていたことでした。Pune市はインドの中でも教育のレベルが高いことで知られており、現在でもインド国内だけでなく、世界から学生が集まり勉学に励んでいます。そのような土地柄もあると思いますが、プロジェクトマネジメント教育に非常に熱心に取り組んでおられたのは、非常に感銘を受けました。このことについてPune Deccan支部の理事の方にも伺いましたが、「インドはこれから成長をしなくてはならない。しかしやみくもに成長するのではなく、持続可能な形でなくてはならない。そのためにはプロジェクトマネジメントの知識は必須であり、我々は教育にコミットしなくてはならない」とのお言葉を頂きました。教育の重要性は万国共通です。

我々PMI日本支部も今後の日本の発展のため、これまで以上に努力せねばならないとの思いを強くしたカンファレンス参加となりました。

Topics／トピックス

海外要人講演

■ハロルド・カーズナー博士による特別講演

PMI日本支部　事務局

International Institute for Learning, Inc.（IIL） のSenior Executive Director であるハロルド・カーズナー博士が来日されたのに伴い、本年２月３日にPMI日本支部セミナー・ルームにて特別講演会を開催させていただきました。

平日9:30からの開始にも拘らず30名に参加いただき満席の会場で博士をお迎えしました。カーズナー博士は、世界的に知られたプロジェクト、プログラム、ポートフォリオマネジメント、戦略計画の専門家で、「Project Management： A systems Approach to Planning, Scheduling and Controlling」（現在第10版）、「Project Management Best Practices：Achieving Global Excellence」など多数のベストセラーがあります。また、カーズナー博士のアドバイスはPMBOK®知識体系ガイドの内容にも大きな影響を与えてきています。

今回の講演テーマは「Project Management Metrics, Key Performance Indicators And Dashboards」。はっきりとした聞き取り易い英語でしゃべっていただきましたので通訳者を用意したのですが不要だったかも知れません。

講演は、今後のプロジェクトマネジメントの方向性を示す内容で、通常６時間程度を要する内容を2.5時間に短縮してお願いしましたが、参加者には大いに参考になったのではないかと思います。

またQ&Aでも参加者の中から積極的に英語での質問が出され、博士の大きな声での回答とも相まって大変盛り上がった講演会となりました。

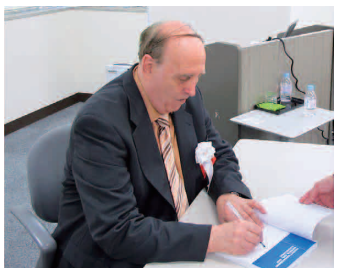
講演会終了後、博士の最新著書をサイン入り、特別価格で販売したり、２名の聴講者に無料で著書を差し上げる抽選会を行ったり、ツーショットの写真撮影を行ったりと、参加者、博士にとって大変印象深い交流ができたと思います。

PMI日本支部は、今後も博士の発言や講演内容に注目していきます。

セミナー風景

わかり易く説くカーズナー博士

神庭 PMI日本支部会長と


著本にサインするカーズナー博士

Best Practice and Competence ／ PM事例・知識

月例セミナー報告

■PMI日本支部　12月度月例セミナー概要

PMI日本支部　セミナー委員会　成田　渉

【セミナー概要】

□**開催期日**：2012年12月10日(土)　13：30～17：45
□**タイトル**：元気の出るプロジェクトマネジメント
□**場　　所**：ハロー貸し会議室　秋葉原
□**第Ⅰ部講師**：降旗 利弥 氏
□**講師のプロフィール**：

- ウイズスマイル代表取締役社長
- これまでの組織運営、マネジメントの経験を元に、IT系／専門サービス業を中心に「売り上げ・利益と社員のやる気を一緒に向上する」仕組みを構築する専門家として活動している。

□**第Ⅱ部講師**：中村　元 氏
□**講師のプロフィール**：

- 日本で唯一の水族館プロデューサー
- 最近は、2011年8月にリニューアルオープンしたサンシャイン水族館（東京都豊島区）などのプロデュースを手掛ける。東京コミュニケーションアート専門学校教育顧問（ドルフィントレーナー学科講師）の他、NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター理事長、日本バリアフリー観光推進機構 代表、財団法人地球市民財団評議員

【この講師にお願いした理由と講演の狙い】

2011年は震災以降いろいろなことがあったが、「年末頃には復興のメドが立っているであろう」ことを祈念しつつ、プロジェクト・メンバーのみならず、PM自身、会社、世の中を元気にするマネジメントとは何かをテーマに据えることとした。

PMにとって有益な話になればとの思いから、IT経験者とIT関係以外の方を一人ずつ講師として迎え、次年に向けて「元気の出るプロジェクトマネジメント」というタイトルでPMおよびプロジェクト・メンバーを勇気づける、モチベーションを上げる意図で2部構成のセミナーを企画した。

【講演内容】

第Ⅰ部ではウイズスマイル代表の降旗さまから、『自らどんどん行動し成果を出すプロジェクトチームをつくる！
～モチベーションを高め、プロジェクトに巻き込む方法～』

と題し、PM自身のやる気を出す考え方、プロジェクト・メンバーに対する向上心の出させ方という内容のお話をしていただいた。

第Ⅱ部では水族館プロデューサーの中村さまから『進化は弱者にこそ起きる～逆境を好条件に変えるには、異端遺伝子を使え～』と題し、サンシャイン水族館のリニューアルでの苦労話、また今回のリニューアルだけでなく、普段のさまざまなご活動からもPMの方々に元気を与えてもらう講演をいただいた。

【自業務へ適用する場合の課題と対策】

降旗さまの講演は、まず受講者隣同士が手をつなぎ、『大好き！』と言い合うことから始まった。PM自ら相手を信じ、好きにならないと相手は近寄ってこないということであった。また、単に聞くだけの行為と傾聴との違いを、声を出し合ってエクササイズすることで、実感させていただいた。その中でメンバーのやる気のタネをいかに発見し、引き出すか。それによって、プロジェクトの成否に多大な影響を与えることを実感してもらえる、有益なセミナーとなった。

第Ⅱ部の中村さまは、一転関西弁で主に写真とホワイトボードを使った講演であった。池袋のサンシャイン水族館のリニューアル前と後の写真を通じて、顧客視点からの鋭い解説をいただいた。その中でこれまで日の目があたらない人（異端児）がやる気を出すことによって、熟練者も変わっていくお話をいただいた。

【講演内容の将来展望】

今回の講演は終わってみれば、お２人とも共通するお話をされていたことがわかった。つまり変われる、成長できるタネを皆が持っており、それをいかに引き出すか!? である。

自分の業務への展開はもちろんのこと、さらにコーチング技術や年齢や経験年数が異なるプロジェクト・メンバーをいかにやる気にさせるかというPMのスキル向上に大いに役立つと思う。

また、これらに関連したコーチング技術、あるいはコミュニケーション技術はまだまだ奥が深いこと、どんどん新しい手法が生まれスキルが変化してきていることを実感した。

セミナー委員会メンバーとしてはこの変化に追随すべき、より具体的で自分の業務へ適用できるセミナーを企画、開催していきたい。

【私が感じた講師の人柄】

講師を務めていただいた降旗さま、中村さまについては、対称的な感じを受けました。印象面では、降旗さまはスーツ姿で非常にまじめな雰囲気であり、中村さまはカジュアルな服装と関西弁で、最初から皆を笑わせていました。

降旗さまは最初から参加者に問いかけ、席から立たせ、あるいは隣の人とコミュニケーションを実践させ、参加者をどんどん納得させていきました。その体感が気持ちよく、講義の内容もこれまでの経験や知識に裏付けされて実に奥深いものであり、あっという間の２時間でした。

一方、中村さまは写真を多用し、しかも関西弁で「どう思います、これー」、「わからんでしょう、これー」といった調子。たまに発せられる冗談も巧妙で大変うけていましたし、説得力は抜群でした。顧客視点がいかに大事であるかを肝に銘じさせられた内容でした。

ネットワーキングにはお２人とも参加していただき、全員と名刺交換を行い、セミナー中にはできなかったより深いお話ができました。人数が少なかった分、裏話や冗談話で盛り上がりました。最後には皆で記念写真を撮り、自らfacebookに載せている受講者も居ました。

お２人ともすばらしい講演だっただけに、64名しか受講申し込みがなかったのは、少々残念に思います。ただ、初めての会場であったため段取りに多少は手間取りましたが、会場に足を運んでくれた方々は2011年最後のセミナーを満喫して帰られたことと思います。

今回、年末の非常に多忙な中で貴重な講演をいただいたことに深く感謝すると共に、これからも継続的な連携が続くことを切に願っております。

■PMI日本支部　1月度月例セミナー概要

PMI日本支部　セミナー委員会　鬼束 孝則

【セミナー概要】

□**開催期日**：2012年1月27日(金)　18：20～20：20

□**タイトル**：クラウド時代のプロジェクトマネジメントのあり方　～アジャイルマインドとパターンランゲージの実践～

□**場　　所**：ハロー貸し会議室　秋葉原

□**講　　師**：羽生田 栄一 氏

□**講師のプロフィール**：

- 株式会社　豆蔵 取締役CTO
- プロフェッショナルフェロー、豆蔵ソフト工学ラボ所長
- オブジェクト指向やソフトウエア工学の実践適用に関するコンサルティング、セミナー講師に従事し、後進の育成にあたる。アジャイルプロセス協議会会長、IPA/SEC設計技術部会委員、情報処理学会ソフトウエア工学研究会パターンワーキンググループ主査、IPA ITアーキテクト・コミュニティー委員などを務める。

【この講師にお願いした理由と講演の狙い】

今回のセミナーを企画する段階において、ITプロジェクトの観点で、時代にミートするプロジェクトマネジメントを意識した講演を実現できないかと考えていました。その中においてこのクラウド時代、めまぐるしく変化する市場にどう取り組めばよいかという問いに対し、１つの回答として、羽生田氏がお持ちの経験をプロジェクトマネジメントの観点からお話しいただくことで、PMの方々に新しい気づきを提供できないかと考え講演に至りました。特にこの講演ではクラウドやアジャイルを専門とされる羽生田氏から、現場に即した考え方や適用方法をプロジェクトマネジメント視点で語っていただくことを狙いとしました。

【講演内容】

孔子の「論語」の言葉に始まり、クラウド時代やアジャイル・マインドの定義から、今後のリーダシップに必要なことは何かを教えていただく大変有益なセミナーとなりました。特に民俗学者である宮本常一の「父からの餞の言葉」は印象に残るものであり、人生における一つの指標となると感じました。また、アジャイル・マインドとはという部分で「メンバーは顧客価値を最大にすべく自律的に動く」や､「顧客･チーム・環境の課題に気付く直観力をもつ」といったマインドはアジャイルだけでなくさまざまな開発現場で生かせる行動指針であるように感じました。

ソフトウエア工学で最も大切な10の考えという中に、「計測できないものは制御できない」や、「車輪を再発明しない」、「欠陥が下流に伝わるほど、修正コストは増加する」といった考えは当たり前なことだが、それを認識しておくということが大切なのだろうと理解しました。

また、パターンランゲージによるプロジェクトというパートでは、モデルによる「見える化」や現場視点でのアーキテクチャー構築、シナリオの見える化＝検証など、まさに現場ですぐに使えるノウハウを講演いただきました。さらに、街や大学、地域など形としてイメージしやすいものに例えていただく講演スタイルにより、難しいトピックも容易につかみとることができました。

【自業務へ適用する場合の課題と対策】

講演の中で上記に挙げた、「メンバーは顧客価値を最大にすべく自律的に動く」や、「顧客・チーム・環境の課題に気付く直観力をもつ」という考え方は、プロジェクトの最終目的である「何のために？」ということを常に意識すべきとい

うことの換言だと認識しました。プロジェクトを進めていると、先に行けばいくほどプロジェクトありきの考え方、すなわちスコープ切りに陥りやすく、最終的なお客さまの満足度を満たしているのか？ 開発者ビューではなくエンドユーザー・ビューで妥協のない仕様になっているか？ という意識の大切さをあらためて気づかせていただいたと思います。また「欠陥が下流に伝わるほど、修正コストは増加する」という考え方についてはコストの話にとどまらず品質面にも影響する話であり、品質を後続フェーズに向けてインクリメンタルに高めていくのではなく初期段階から高い品質を維持していくというアプローチの大切さを考えさせられました。

【講演内容の将来展望】

今回の講演の中では、クラウド時代に求められるIT人材を「ソムリエ」と定義し、業務現場とクラウド開発技術をブリッジする人材と位置付けられました。この考え方は、今まさにこの部分を担う人材が求められていることの裏返しであり、将来を展望するうえで必須となる人材となってくるだろうと直感的に感じました。また、その名のごとく知識とテクニックを持ち合わせ、そのうま味（メリット）を最大限引き出す人材を養成することが企業にとり優先課題ではないかと感じました。今回の講演から先に見えてくるものは、クラウドを語り、求める時代から、自分自身で感じ使いこなす時代であると考えます。この先にどのようなクラウド時代が待っているのかが楽しみになる講演でした。

【私が感じた講師の人柄】

講師を務めていただいた羽生田様は大変気さくで好奇心旺盛な方だと感じました。また私たち企画者側のリクエストに対してもご自身の持たれているネタを頭の中でストーリーだて、時間配分を練られていた様子は大変頭の回転の速い方だと感じました。今回の講演を打診した当初から大変多忙な方だと感じる場面が多く、調整することが難しい場面もありましたが、羽生田様のご配慮があり大変助けられました。

今回、参加いただいた方々への配布資料と講演時のスライド内容が異なる部分があり、参加者が戸惑われる場面が見られましたが、羽生田様へは講演当日まで可能な限り新しい情報を盛り込み新鮮な情報を提供いただくことを優先いただいていましたので、ご了承いただければ幸甚です。

今回100名を超える方々に申し込みをいただき、クラウドやアジャイルといったキーワードに多くの方々が鋭く反応することをあらためて知ることができました。今後セミナー委員会としても皆さまのご意見を広く集め、ご期待に添えるセミナーを提供できるよう活動していきますので、よろしくお願いいたします。

最後に今回のセミナーを実現するにあたり、多大なるご支援をいただいた講師の羽生田様、そして関係者の方々へお礼を申し上げます。羽生田様、これからも継続的なつながりを保持させていただけますよう、よろしくお願い致します。

■PMI日本支部　2月度月例セミナー概要

PMI日本支部　セミナー委員会　永井 みつる

【セミナー概要】

□**開催期日**：2012年2月27日(月)　18：20～20：20

□**タイトル**：「内省力」でプロジェクトを乗り切れ！

□**講　　師**：篠崎 哲雄 氏

□**講師のプロフィール**：

- NTTデータ先端技術株式会社　ソリューション事業部部長
- PMP、シニア産業カウンセラー、キャリアコンサルタント、経営士

【この講師にお願いした理由と講演の狙い】

今回の月例セミナーでは、PMの「聴く力」がメンバーの力を引き出すことに有効であるばかりでなく、PM自身の内省を促しプロ意識の醸成につながることを体験的に経験していただくことを目的として企画しました。心理カウンセリングの技法を用いて「システム・カウンセリング」に取り組んでこられた経験から、PMI日本支部公開セミナー　PMヒューマンスキル醸成メンタープログラム の講師も務められた篠崎講師にお願いしました。

【講演内容】

「内省力」でプロジェクトを乗り切れ！と題し、ワークショップ形式の講演をいただきました。６名がけの島に分かれて着席して開演です。まず、オリエンテーションとして講演の目的が定義されました。

- 内省することの重要性を体験的に理解する。
- メンバーの課題解決を促進する（内省を促進する）リーダとしての「聴く力」を体験的に理解する。

次に小講義１　内省を促進する聴く力として、職場の問題意識のテーマや、「聴く力」のプロセス化と内省のモデルなどが示され、内省力と聴く力の関係が定義されました。

その後いよいよ島ごとにグループ・ワークの開始です。

まずお互いに知り合うために２人一組の自己紹介を行った後各自が他のグループ・メンバーに他己紹介を行います。その後、自分がどう感じたかを振り返りシートに記入していきます。

作業ごとに制限時間が決められ時間が来ると講師がアラームを鳴らします。意外に短く感じる時間に、参加者は聴くことの難しさを少し感じ始めたようです。次に、信頼関係の構築として、２人一組で、聴き手と話し手に役割を交代しながら、現在の悩みなどの提示されたテーマについて話し、聴いていきます。受講者が真剣に聴き、話す姿に、関係者は安堵し、会場のボルテージも上がっていきました。この後休憩を挟んで、小講義２　内省を促す聴き方として、聴き方のコツや聴くことによる意識の変化の調査事例などが提示されました。次に後半のワークショップのテーマとして、「聴き方と話し手の印象」が示され、聴き手の態度によって話し手の印象がどう変わるかの体験についての課題が示されます。

- マネキンに向けて話す
- 仕事をしながら聴く
- 聴くことに集中する

聴き手がこのような態度を取ったとき、話し手がどのように感じるかを２人一組がテーマを決めて役割を交代しながら体験します。その後、各自がふりかえりを記入しグループ内で体験を共有します。この頃には、各グループはすっかり打ち解けた様子で活発に議論し、とても初対面同士とは思えない雰囲気になっていました。その後の小講義３ではまとめとして、PMの内省、PMのプロ意識、ITスキルレベルの因果モデル等、講師による研究成果の一部が紹介され、PMの内

省がPMのプロ意識（integrity、respect、compliance）の醸成と関係することが提示され、ワークショップは締めくくられました。

最後に各自が講師向けのアンケート、PMIJ向けのアンケートに記入をし解散となりましたが、各グループの活気は収まらず、解散後も話し込んでいるグループがあちらこちらで見られました。そのまま20名ほどで、PMIJセミナー委員会のボランティアの誘導でネットワーキングが始まり、軽食とビールなどの飲み物をとりながら、講師も交えて、歓談や名刺交換が和やかに続きました。

【自業務へ適用する場合の課題と対策】

当講演を自業務へ適用する場合にはワークショップで体験した自分の気づきを「内省」へと深めて言語化することがまず肝要だと感じました。どのような聴き方をすると相手はどう感じるか、相手の話や内省を引き出す聴き方はどうか？プロジェクトの運営では、漠然とした印象ではハウツーになりません。自分なりに言語化して腑に落としてゆくことで、自分が変われば、まわりも変わってゆく、相互作用であることを意識する必要があると感じました。

【講演内容の将来展望】

講師の研究成果に基づく、PMのプロ意識の概念（誠実・尊重・順守）と内省行動との関係が講義の後半でふれられました。これをフレームワーク化したワークショップの実現を期待したいと思います。

【打ち合わせで記者が感じた講師の人柄】

講師を務めていただいた篠崎氏の人柄を一言で表現すると緻密でいながら大胆といった印象です。ポイントを絞り込んだワークショップを緻密な計算で構成し、当日は大胆な投げかけで参加者の心を自然な形で取り込んでおられました。

今回非常に多忙な中で講演をいただいたことに深く感謝すると共に、これからも継続的な連携が続くことを願っています。

第2回 *it*SMF Japan/PMI Japan 共催シンポジウム

■シンポジウムの概要

PMI日本支部　事務局

2012年2月10日(金)の午後、「ITライフサイクル・マネジメントを考える　～プロジェクトマネジメントとITサービスマネジメントの連携～」と題して、掲題の共催シンポジウムを慶應義塾大学日吉キャンパス 協生館藤原洋記念ホールにて開催しました。

2010年11月に第1回を開催して以来、1年3カ月ぶりとなりましたが、*it*SMF JapanおよびPMI日本支部から併せて386名の方々に申し込みいただき盛況なシンポジウムとなりました。

本シンポジウムは以下のように3つの講演とパネル・ディスカッションで構成しました。

1. 基調講演としてPMI日本支部会長　神庭 弘年 氏による「サービスマネジメントを構成するもの」
   講演概要：IT部門の役割は「サービス」にあるのであり、システム運用や情報技術はサービスの手段でしかない。では、「サービス」とは何か、経営の期待とは何か、などをどう考えればよいかについて紹介。
2. *it*SMF Japan講演として東京海上日動システムズ株式会社 ITサービス本部長　小林 賢也 氏による「ITIL®は運用部門だけのものではない」
   講演概要：ITIL®が目指す目標は、IT サービスが顧客企業のビジネスの価値を上げること。その目標を達成するためには、ITIL®を運用部門だけで取り組んでいては駄目。運用部門と開発部門が、いかに同じ目標を目指して連携するかがポイントであり、それにチャレンジしている同社の事例を紹介。
3. PMI講演としてPMアソシエイツ株式会社　代表取締役 鈴木 安而氏による「サービス開発だってプロジェクトだ！」
   講演概要：「プロジェクトは価値を創出し、運用はその価値を維持しあるいは高めビジネス目標を達成する」というコンセプトを元に、PMBOK®ガイドとITIL®との関係を明確にし、両者が連携を図っていくさまを紹介。
4. パネル・ディスカッションとして *it*SMF Japan 西野副理事長がモデレータを務め、*it*SMF Japan 小林副理事長、南理事とPMI日本支部 神庭会長、PMアソシエイツ 鈴木代表取締役の4名のパネラーにより、両団体の連携について参加者も交えディスカッション。

参加者のアンケート結果では、満足度が高く毎年開催を希望するという回答を多くいただきました。異なる団体が共催する場合は開催までの相互の負荷は大変なものですが、互いの考え方や展開方法を理解でき、今後の両者の活動によい影響を与えるものと思います。今後もご期待いただけるものと思います。

以下、各講演とパネル・ディスカッションの概要を、ボランティア記者による投稿によりご紹介します。

「ITIL」は英国Cabinet Officeの、「PMBOK」は米国Project Management Institute, Inc.の登録商標です。

*it*SMF Japan講演

■基調講演 『サービス・マネジメントを構成するもの』

ボランティア記者 日本アイ・ビー・エム株式会社 高橋 正博

【概要】

□**開催期日**：2012年２ 月10日(金) 13：15～14：15

□**タイトル**：サービス・マネジメントを構成するもの

□**講　　師**：神庭 弘年 氏

□**講師のプロフィール**：

- 神庭PM研究所 代表
- PMI日本支部 会長

【講演概要】

①プロジェクトマネジメントとは

ITサービス産業におけるプロジェクト・マネジャーの役割は重要であり、顧客からの要求や限られた予算のなかで期待以上の成果を出すためには、より洗練されたプロセスの確立と十分に訓練されたプロジェクト・マネジャーが必須になってきている。そのような背景のもとで、近年PMP資格にチャレンジするプロジェクト・マネジャーが増えている。

資格取得にチャレンジすることは非常に結構なことであるが、PMP®資格は取って終わりではない。PMP®資格を取る過程で勉強したPMBOK®を実際のプロジェクトで活かさなければ意味がない。どのプロジェクトでも少なからず問題は発生しそれをマネージする必要がある。そのためにもPMBOK®でうたわれている９つの評価軸でものごとを整理することを実践してほしい。

②ITサービスに対する経営者の期待は何か

経営者の80%はITの活用で企業競争力を高められると思っているが、実際には経営者の半数は期待するほどの効果をITで生み出せていないと評価しており、経営者の期待と実際に提供されているITサービスの間には、まだまだギャップがある。

また、ITサービスに携わる者も、日々の運用に埋没せず、常にチャレンジ精神を持って、IT部門がどのように経営者の期待に応え、ビジネスを変革するためにどう貢献できるかを考えてほしい。

③グローバル化に日本はどう対応するか

あらゆる産業が海外に出て行かなければ企業としては回らない現状で、ITの開発･運用もグローバル化が進み、データ･センターは北米、開発はアジア、運用は中国という図式になりつつある。そのような環境のなかで日本はどうすれば生き残って行けるのだろうか。

ITのサービス・レベルについては、日本はやり過ぎではないかと思われるぐらいコストをかけている。諸外国では銀行のATMの稼働が止まっても問題にしないが、日本ではオンラインがちょっと止まっただけでも会社をあげての大問題になるし、止めないための対策に膨大な費用をかけている。

世界中のリソースから最適な人材を活用する、グローバルにフラット化された先進的な企業がある。今後、グローバル

に活躍する人材になるには、何よりもチャレンジ精神と語学などのコミュニケーション能力が必要である。自社のビジネスプロセスをなぜグローバル化しなければいけないのかを考えられる人材になってほしい。

【所感】

資格は取って終わりではなく、活かさなければダメだとのお話は確かにその通りで、日々のプロジェクト作業に追われ、PMBOK®の考え方を十分に活用できていない私には非常に耳の痛い話でした。

私の部署でも、「ITを安定稼働させビジネスを止めない」ということには意識を集中していますが、「IT部門を起点にビジネスを変えて行く」という発想にはなかなか至らないのが実際のところです。神庭氏のお話をうかがい、今後はITとビジネス変革の可能性について常に意識しく必要性を感じました。

また、ATMに代表されるように、日本における過剰とも言えるITサービス・レベルに慣れてしまった私たちが、アジアや中国とどう互して行くか、あるいはどのように存在感を示して行くかは簡単には答えの出ない問題であると思いました。

*it*SMF Japan講演

■ITIL®は運用部門だけのものではない！

ボランティア記者　MBPジャパン株式会社　高　士山

【概要】

□**開催期日**：2012年２月10日(金)　14：30～15：30

□**タイトル**：ITIL®は運用部門だけのものではない！

□**講　　師**：小林 賢也 氏

□**講師のプロフィール**：

- 東京海上日動システムズ株式会社ITサービス本部長
- *it*SMF Japan副理事長

【講演概要】

日本において、ビジネスの中にコンピューターが採り入れられたのは1950年代だと言われており、東京海上日動（当時は東京海上）もその当時にコンピューターを導入しました。1970年代の自動車保険を対象とした第一次オンラインを経て、1980年代には全ての保険商品を対象とした第二次オンラインを稼働させ、2000年以降はサーバーを中心とした戦略的なシステムを数多く構築し、2008年には保険商品や事務の再構築も含めたシステム刷新が行われました。

そんな中、2000年前後のサーバー・システムの大量構築をきっかけに、運用品質劣化の問題が表面化。運用プロセスを再整備するため、グローバル・スタンダードになりつつあったITIL®をもとに可視化・整備し、2005年頃にはガバナンスも含めたマネジメント・プロセスが構築されました。

「ITIL®が目指す目標は、ITサービスが顧客企業のビジネスの価値を上げること。その目標を達成するためには、ITIL®を運用部門だけで採り組んでいては駄目で、運用部門と開発部門が同じITIL®の目標を目指して連携することが重要です。

事例①　サービス・カタログとSLM

運用部門が主導し、開発部門との共同作業で、EA（エンタープライズ・アーキテクチャ）をもとに、約200のサービスを定義し、システム・プロファイルとしてまとめました。

システム・プロファイルは開発工程の中で開発部門が作成するものですが、その実効性を高めるために運用部門も関わる以下のプロセスを組み込んでいます。

- 運用設計レビュー時に、開発、運用、オーナーの合意で確認する。
- 運用部門が主導で、年に一度の見直しを行う

システム・プロファイルには、サービス定義に加え、システムの構造も記載し、構成管理情報としても利用しています。また、サービス定義の中にはCIA（機密性、完全性、可用性）でサービスの重要度を定義し、SLAとも連携しています。

事例②　デザインとトランジション（運用移管プロセス）

サービス要件（非機能要件）の重要性が高まるにつれて、システム設計においてもサービスに関する要件の要素が増えています。そのため、開発プロセスの中に運用管理のプロセスを組み込み、運用の基本方針、運用設計の基本的な考え方を１冊の運用設計ガイドにまとめ、開発部門に提示するようにしました。運用設計ガイドにはオンライン・サービス時間、バッチ運用、障害運用の標準化などとともに、運用監視、障害対応などの運用に考慮した設計をしてもらうための考慮点やルールを明確にしています。

また、ガイドだけでなく、各種インスペクション・シートやチェック・シートも提示し、プロジェクト計画時、要件定義・外部設計時、サービス・イン判断時に、運用部門が確認するプロセスを組み込んでいます。

運用移管プロセスにおいて、移管評価によりサービスが運用部門に移管されると、同時に責任も運用部門に移管されます。すなわち、サービス・インが可能か否かの評価権限が運用部門に移ります。このような、責任と権限を明確にすることでプロセスの実効性が上がるのです。

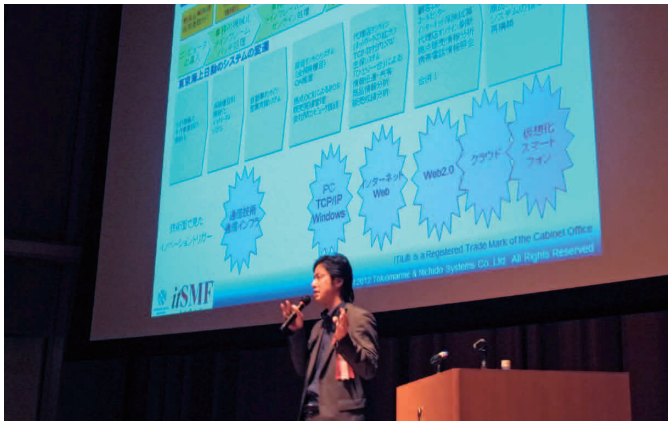
【サマリー】

開発部門と運用部門の連携の際に重要なことは、

- 強力なトップダウンと経営の理解
- 人事交流（開発部門トップの人材を運用部門に移すなど）
- SMOの設置
- 運用部門もビジネスを知る
- 運用の重要性を広く知らしめるために、内外で語り続ける

【所感】

東京海上日動システムズは業務の成長、技術の革新を先読みして、システムの構築から、開発、運用のプロセスまで時代の流れに合わせて変革を行っています。ITIL®をうまく導入して、運用部門主導で開発部門と連携し、サービスの有効性、発展性、品質などを向上させています。東京海上日動システムズの運用部門と変革そのものをリードし、成功を収めているという小林氏の事例紹介に感銘をうけました。



*it*SMF Japan講演

■PMI講演 『サービス開発だってプロジェクトだ！』

ボランティア記者 日本電気株式会社 植田 晃市

【概要】

□**開催期日**：2012年２月10日(金) 15：30～16：30

□**タイトル**：サービス開発だってプロジェクトだ！

□**講　　師**：鈴木 安而 氏

□**講師のプロフィール**：

• PMアソシエイツ株式会社 代表取締役

【講演概要】

ITシステムを開発するプロジェクトとITシステムの運用サービスは一線を画すものとして考えられがちだった。本セッションでは、本構築されたシステムを運用して初めてビジネス目標が達成できるとの認識から、ITIL®、PMBOK®、BABOK®といったグローバルに普及している標準フレームワークに携わる者にとって顧客ビジネスに貢献していく視点を気づかせていただくことができた。

ITシステム開発プロジェクトとITシステム運用サービスのそれぞれの観点から顧客ビジネスに貢献するサービス開発について、以下のようにご紹介いただいた。

サービスの特徴は、無形であり品質のバラツキが生じやすく、期待値によってその価値が決まってくるものである。このため、顧客ビジネスへの貢献には、サービス・マネジメントの視点が必要となる。また、ITシステム開発の要件定義においては、受注側はプロフェッショナルであるとの認識を持って主体性を発揮してユーティリティーだけでなく、ワランティーまで引き出していくことで顧客ビジネスに貢献していける。そして、新たな顧客ビジネスへの貢献は、変更管理と継続的改善からこそ生み出される。この重要性を認識した上で、運用契約書には変更プロセスを盛り込んでいくと良い。

このプロセスは、ITIL®の変更管理マネジメントだけではなくPMBOK®においてもステークホルダー・マネジメントにて扱われており、このビジネス貢献における重要性からPMBOK®第５版からは知識エリアが独立させることとなった。このように顧客ビジネスへの貢献に向けてITIL®とPMBOK®の融合が進んできているように見られる。

また、標準化フレームワークについては、単なる監査やレビューの対象として考えるだけではなく、どのようにしてビジネス貢献していくのかと、それを参考として自らが考え、さらには挑戦していくスタンスが今後必要になっていくであろう。あるブロックを積み上げている職人たちに、あなたは何をしているのか？ と問うた時、「塀をつくっている」との職人もいるが、「この街を守る防火壁をつくっているんだ」との高い意識を持っている職人もいる。それぞれが顧客ビジネスへの貢献に向けて高い意識を持ち、考えていくことこそ、さらなるITサービスの価値を生み出していくことの礎になるのだろう。そして、それは運用から始まる。

【所感】

私も業務においてITIL®、PMBOK®の視点から顧客への提案活動を行っているが、ともするとこのグローバル標準化フレームワークに準拠することで満足してしまい継続的に顧客ビジネスに貢献していくとの心構え、魂が抜けてしまっていたことに気づかせていただいた。あらためて、本セッション講師の鈴木様、機会をいただいたPMI日本支部と*it*SMF Japanの皆様に感謝申し上げたい。

*it*SMF Japan講演

■パネル・ディスカッション

ボランティア記者　株式会社協和エクシオ　渡辺 健成

【概要】

□**開催期日**：2012年２ 月10日(金)　16：45 ～ 18：15

□**パネラー**：神庭 弘年 氏（PMI日本支部会長）、
鈴木 安而 氏（PMアソシエイツ㈱代表取締役）、
小林 賢也 氏（*it*SMF Japan 副理事長）、
南 敏 氏（*it*SMF Japan 理事）

□**モデレータ**：西野 弘 氏（*it*SMF Japan 副理事長）

【テーマ】

1. PMとITサービスの融合が進まないのはなぜか。
2. 日本の組織的な成熟度はどのレベルか。
3. 人材について。若返りをどうしたらよいか。
4. 会場参加者との質疑応答

【講演概要】

1. PMとITサービスの融合が進まないのはなぜか。

この話題の象徴的なキーワード「金融」を挙げたお二人の発言を紹介します。

○運用側がビジネスを知ってはいけないという理屈から監督省庁が開発と運用を分ける指針を出していた。最初に役割分担を決めたところから始まっていて、それがまだ続いているのではないか。

○とにかく作ることが優先で、作ったら下流の運用側へ渡せばよいという風潮があった。製造業は、生産ラインが生命線でシステムは補助具であるかもしれないが、金融はシステムが生命線。

○開発側は作ればうまくいくという幻があったのでは？ 融合すべきはまず金融。

＜ まとめ ＞

○2001年に国防省で学んだこと。プロジェクトマネジメントでもITサービス･マネジメントでもない､アキュエイション・マネジメントを知った。開発や運用がどうという話ではなく、”国防”という価値が得られるかどうかを評価している。つまり本来何をすべきかについて考えるべきだ。

○ビジネスは勝ち残っていかなければならない点で同じこと。そのために何をすべきなのかという視点に立てば、お互いにコミュニケーションをとり一緒に勉強していくべきだと考える。

2. 日本の組織的な成熟度はどのレベルか。

日本の組織の成熟度は高校生か大学生程度であるとの認識が大勢でした。

○USがプロだとすると日本は大学１年生。SLA、KPIなど数値化、見える化が進んできているが、経営レベルまでは伝わっていないと実感している。

○高校生から大学生程度だと思う。運用マネジメントでは浸透してきているのではないか。ITIL® V3の概念はまだ一部の人々にとどまっている気がする。

○システム停止が極端に低い現実を見ると、システムをお守りすることはトップ・クラスであり、「強い組織」と言えるが、問題は海外と提携する場合には弱点に変わってしまうのではないか。その点で成熟度が低い。

○高校生レベルであろう。権限がなく責任だけ押し付けられる「機能型」が多い。任せられていないという意味で成熟度が低い。

＜ まとめ ＞

○現場を見ると世界最高。ただし、コンマいくつかの精度を求めるのはよいがそれでビジネスに勝てるのか？パネラーの方々には今の状態を的確に表していただいた。

3. 人材について。若返りをどうしたらよいか。

最も深刻な話題であるためでしょうか、多くの発言がありました。分類すると３つの観点（若者、教育、会社）について、現状を示した上で提言がありました。

～ 現状 ～

【若者】

○海外の人とぶつかって「負けた！　悔しい！」となればよいがそのままの人が多い。海外の人は勉強好きで元気がある。

○一部の学生は興味を持ってくれているが、経済的にITIL®などを受験できない学生が多い。

○ITと言えば以前は花形だったが、人気が無くなったのかも？

【教育】

○日本でPM関連学科を擁しているのは千葉工業大学しかなく、学士までしか取れない。対して中国の大学ではマスター／ドクターまで取得できる。中国はじわじわとポジションを上げつつある。この落差に耐えねばならないのは民間の企業の現場。どうにかならないか。

【会社】

○昔は上司からしつけられたものだった。今は上司が指導できない。

○企業は学生に即戦力を求めるが、標準化されているものならばわかるが、企業独自のものはわかる訳がない。

○失敗させない ⇒ チャレンジさせない ⇒ 成長しない というパターンに陥っている。

○開発系部門はともかく、運用部門のキャリアパスはどうなっているのか。育成する気がないように思える。

～ こうあるべき（実践例を含む）～

【若者】

○誰も助けてはくれないから個人で自衛するしかない。自分で決め、やる気になれば教材は日本にもたくさんある。

○知識を備えたなら後は実行するしかない。自分で目標を決めて「こうなりたい、育ててください。」と自ら宣言し、会社がそれをサポートする体制を作るべきだ。

【教育】

○日本の大学、文科省には危機感を持ってPM教育に力を入れてほしい。

【会社】

○人を育てるのはOJTと上司である。仕組みだけではなく「絶対に彼をできるPMにするんだという思いが必要。

○トラブル発生時にこそシステムを知ることができる。OJTでそれをどうやってやらせるのかを考える必要がある。

○自分でやろうとする文化・風土を創ること。例えば平均年齢27歳という若い国ベトナム人は勉強好き。そのモチベーションの高いベトナム人に同じフロアに入ってもらい、日本人に肌で感じてもらう機会を作るようにしている。

＜ まとめ ＞

○ITは7Kと言われているが、GoogleやfacebookのようにIT数年で兆単位のお金が動くことは、20世紀では考えられなかった。しっかりと引き継いでいく専門分野も必要だが、それとは関係ないものを創ってしまうのもITの魅力。これには多くの若い人が必要なのでどんどん出てきてほしい。

4. 会場参加者との質疑応答

〔質問１〕PM＝ITのイメージが強く、若い人にはネガティブに取られる言葉のようだ。PMはITだけではないのにそのように受け止められるのをどう感じるか？

○PMI個人会員の７割はIT関係者だ。IT業界以外の人にも入ってほしいが簡単ではない。

○ITの人が一番悩んでいるからなのか。

○ITに対してポジティブなイメージを持つ学生もちゃんといるので悲観することはない。もっとITの魅力をアピールしていくべきだ。

〔質問２〕小林氏の講演にあった”基盤と運用の一体化”について、過去を振り返って問題、あつれきなどあれば教えてほしい。

○「私作る人、あなた動かす人」という壁を外そうとした。実際、幅が広がったと言う人もいれば、非効率だと思う人もいた。５年経ち良い感じになっていると思う一方、非効率な部分があるのも確かだ。

〔質問３〕人材について。神庭氏の講演に”今後25%のPMが離職”とあったが､技術の継承はどのようにしているのか？

○ケーススタディーから気づきを持たせる。過去の事例を集めて考えさせる。

○ボトムに長持ちする知識、PMであればPMBOK®の様な汎用的なものを土台にして訓練しておくべきだ。

【所感】

開発と運用の壁、人材不足とIT業界が抱える課題に切り込み白熱した意見交換がなされました。ネガティブなイメージでばかりでなく、ビジネスチャンスがある魅力ある業界だと胸を張って言えるように、私たちPM一人ひとりが頭を使い決して諦めないこと。それが未来を創るのだと切実に感じました。さらにはIT業界だけでなく、他の業界の方にもどんどん参加していただき、さらに大きな視野でビジネスをとらえることも必要だと考えさせられました。

他国カンファレンス報告

■PMI Pune-Deccan Annual Project Management Conference 2012 参加報告

PMI日本支部　事務局　田中 洋一郎

2012年2月2日～5日の間、PMI Pune-Deccan Annual Project Management Conference 2012（以下「Conference 2012」）への参加および、ビジネス・ミーティングのため、PMI Pune-Deccan支部に出張しましたのでご報告します。

1. Pune（プネ）について

ムンバイよりデカン高原を内陸に南西方向に向かい約170キロ、恐怖の「カミカゼ・リムジン」に乗ること4時間弱の距離にある。日本でいえば軽井沢、高級リゾート地である。

インドの名門プネ大学、MIT（マハラシュトラ工科大学）をはじめ17ものトップ工科大学があり、東のオックスフォードと呼ばれている。また、近年ITを中心に目覚ましい発展を遂げており、バンガロールと並び東のシリコンバレーとも呼ばれている。プネは、またインドで最も日本語教育が盛んであり、会場に日本語を流ちょうに操る人が数多くいるのには驚きであった。

2. PMI Pune-Deccan支部について

PMI Pune-Deccan支部はインドで10あるPMI支部の一つ、2005年設立、現在会員725名、場所柄インドで最も急拡大しており、積極的にPMI内外各支部との交流をはかっている。PMI Pune-Deccan支部がPMI日本支部（以下「PMIJ」）主催のPMIJ Summer Festa 2009に講師を派遣して以来、両者はさまざまな交流を続けている。今回Conference2012にPMIJ杉村理事が招待され講演を行うにあたり、ビジネス・ミーティング（支部交流に関するMOU詰め、PMI Japan Forum 2012への講師派遣要請）をお願いしたところ、「ぜひ講師を派遣したい」とのことであり、楽しみである。

3. Conference 2012について

今回のConference2012はPune-Deccan支部の最大のイベントであり、参加者は300名、うれしいことに半数が20～30代の若手で、女性の多さも目についた。また、本イベントはインド国内でも注目度が高く、全国からのネット参加者が1,600名にも達したとのことである。

プログラムは以下の通り。

- 主催者あいさつ　Girish S Kelkar会長
- 基調講演　Mrityunjay Singh氏/Infosys：プロジェクトとリーダシップのあり方
- 招待講演　Nirmalendu Jajodia氏/CTO, NCDEX：Project and Change Management in Exchanges
- 招待講演　V. Subramaniam氏/Director IT & CIO, OTIS India：Discipline of Execution
- 特別講演　Noriyasu Sugimura氏/PMI Japan Chapter Delegation：Tsunami Rehabilitation and Reconstruction Efforts

■他国カンファレンス報告

1）声高らかなGirish S Kelkar プネ支部会長あいさつ

会長あいさつは躍進目覚ましいインドを象徴するものであった。“Can we Change India?”と題し、2020年までに米国を超える国内総生産（GDP）大国を経済目標としているが、Social Challengeの担い手としてPMがこれから克服すべきものとして、以下をあげている。

- Culture Environmentの克服
- Breaking the Myth（Myth：神話）
- PM Competencyの向上

インドで英語を自由に操る人口数は米国内のそれを既に凌駕し世界一とのことである。欧米とのビジネスでのつながりは深く、静かにしかも急速に、激しく進行している。

2）PMIJ/杉村理事特別講演「Tsunami Rehabilitation and Reconstruction　Efforts」は当日の目玉

杉村理事の特別講演では3.11災害状況と支援へのお礼、PMMPDR、PMIJ活動紹介が簡潔に、手際良く紹介された。インドはモンスーン被害の多い国、話題のホット性もありほとんど全ての参加者・関係者が出席、講演時間帯は会場の外はガラガラ、会場は満席状態であった。
（Conference2012については：http://2012.pmiontarget.org/参照）

4. プネで感じたこと

1）インドはアジアと思ったら間違い、欧米と海峡をひとつ隔てた欧米の隣国である!!

日本で「Y2K」問題が盛んだった頃、英語人口の多いこと、テレコム技術の進展もあり欧米一流企業コールセンターの「インドシフト」がせきを切ったがごとくブームとなり、進化しながら今も続いている。案内をしてくれた支部会員であるKshipraさんの友人の何人かは、欧米のビジネス・アワー（インドでは夜間）にコールセンター勤務をし、昼間は大学院で会計学を勉強しているとのこと。なぜ会計学かと聞いたところ、主要米国会計事務所の会計処理はお客と直接のやり取りをする機能を除き、全てインドにアウトソーシングをしており、これがオペレーターのキャリアアップ・パスになっているとのことである。

2）聞きしに勝るプネのグローバル化 、我々は目を覚まそう!!

政府の経済特区の指定もあり、ものすごいスピードでグローバル化が進んでいる。プネは大きく以下の３地域に分かれており、住む人も経済活動も違うように見えた。

①旧プネ地区：インドの都市に多く見られる、騒音、土けむりが混在一体化した町、伝統的な超過密都市。

②新プネ地区：学園都市、学生および勤労者の町。建物は新しくはないが落ち着きが感じられる町。

③未来プネ地区：シリコンバレーの先を行くような超未来都市。経済特区となっており世界の超一流企業が進出。この地区には特別の許可がないと入れないのである。想像を絶する規模の開発が今も進行中であり、政府のプネ開発に懸ける意気込みが感じられる。誰もが「俺は絶対ここで働く！」と、思うこと間違いなしの町。

3）摩訶（まか）不思議なインドスタイルのタイム・キーピング

Conference2012の進行は一言でいえば「大陸的で大変おおらか」、別の言葉でいえば「波乱万丈」であった。開会あ

杉村理事による講演

杉村理事による講演

いさつが終わった時点で既に30分の遅れ、講師のなかには司会の数回にもわたる（袖を引っ張っての）時間切れ降壇指示を振り払い45分の持ち時間で90分間しゃべり続ける猛者もおり、自己主張の強さは大変なものであった。PMIJのプレゼンテーションも飛行機時間の関係上、急きょ順番を繰り上げて行わせてもらった（これは持ち時間通りに終了）。しかしながらConferenceも終わりの頃になると若干の遅れはあったが、時間通り、成功裏に無事終了の雰囲気となっていた、こればかりは不思議であった。

4）プネの人は間違いなく親日的、しかしそれだけではことは進まない

滞在中にMIT主催の日本語スピーチコンテストに出席する機会があった。小学生から主婦に至るまで20人以上の人が熱心に日常の経験を日本語でスピーチをしていた。聞けば今年で26年目になるとのこと。地区予選、全国大会と続いているそうである。

関係者によると日本はイギリスを除けばインドに進出したのは先進国中では一番古いとのこと。しかし、悲しいことにやっていることは進出当時とほとんど変わらない、と嘆いていた。子供たちの一生懸命なスピーチを聞きながら彼らの努力にどう応えるのがよいのだろうか？　ばかりを考えていた。

謝辞：今回のビジネスコンタクトに際してはGirish Kelkar会長、Girish kadam副会長、Col Samuel Dhar 国際部長をはじめ支部のKshipraさん、Diptiさんには大変お世話になりました。ここに御礼申し上げます。

日本語スピーチコンテスト

プネ幹事との交歓会

Activities／支部活動

部会紹介

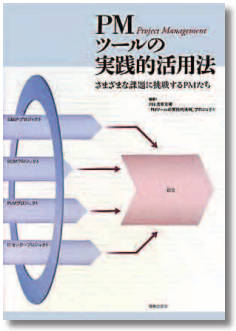
■新たな挑戦　「PMツール研究会」の発足

PMツール研究会 代表　村上 竜一

■はじめに

私がPMツールという言葉をいつ頃から使い始めたのか、もう覚えていません。気がつけば私の中では当たり前の言葉になっていました。「PMツール」をインターネットで検索すると、いわゆる「プロジェクト管理ツール」が出てきます。マイクロソフト社のMSProjectのような…。しかし私はもう少し広義にこの言葉を使っています。プロジェクトを円滑に進めるための道具、材料、PMBOK®の標準で定義される「ツールと技法」など。さらには、プロジェクトに限らず、ポートフォリオ、プログラムマネジメントの標準に出てくる「ツールと技法」も含めて考えています。それは「PMツールの有効活用は、メンバー間に円滑な意思疎通（コミュニケーション）をもたらし、プロジェクトを成功に導く」と考えているからです。

■研究会発足の経緯



2007年、ドラガン・ミロセビッチ著の「プロジェクトマネジメント・ツールボックス」の訳本をもとに、PMI日本支部でメンター・プログラムが行われました。当時のメンター・プログラムの成果物は、PMI日本支部の会員のページからダウンロードすることができます。400ページからなる記録書となっておりますの、今後「プロジェクトマネジメント・ツールボックス」を購入される方は、副読本としてご活用いただければ幸いです。

そして2009年、メンター・プログラムで学んだツール群を実践で活用する場合を想定して「PMツールの実践的活用プロジェクト」が立ち上がりました。このプロジェクトは成果物を書籍として出版することを目的として活動を開始し、プロジェクトのタイトルそのままに、2011年7月に無事出版の日を迎えることができました（右写真）。

出来上がった書籍は、ある電子部品会社が社運をかけて取り組んだプログラム（4つのプロジェクトを束ねたもの）の企画段階から終了までを62のエピソードを織り交ぜて紹介したもので、それぞれのエピソードにPMツールの活用や考え方などについて解説をつけています。PM初心者にはいささかハードルが高いものの、何度か経験を積んだ若手PMには座右の教材として、熟練PMには、ある種の振り返りのきっかけにしていただければ幸いです。

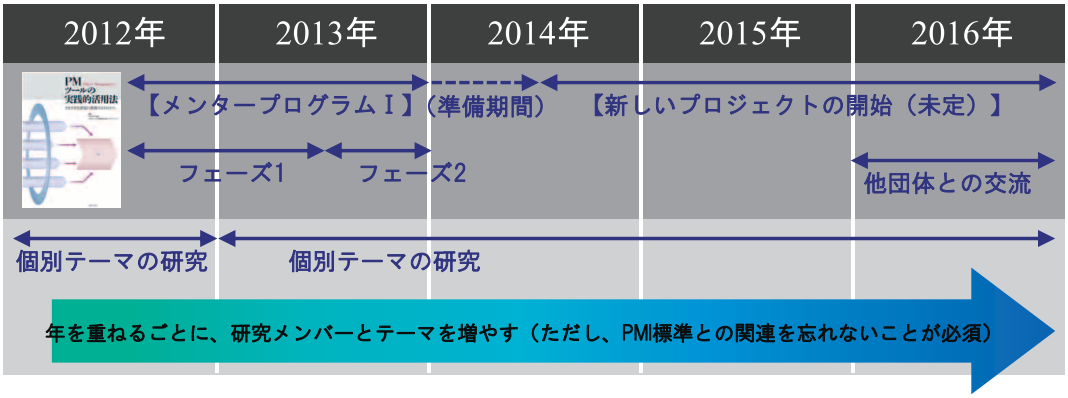
さて「PMツールを極める」とはどういうことなのでしょうか？　与えられたMSProejctなどのツールをうまく活用することでしょうか？　ガントチャートに稲妻線を描くことが管理になるのでしょうか？　あるいは課題管理表の活用は？

たったこれだけの皆さまがよくご存じのPMツールでさえ、実践で上手に活用できずに苦労されているのではないでしょうか？　「PMツールの有効活用は、メンバー間に円滑な意思疎通（コミュニケーション）をもたらし、プロジェクトを成功に導く」。この考えは昔も今も変わることはありません。それを証明し皆さまそれぞれの現場で役立てていただくためにも、今回、「PMツール研究会」を発足させていただきました。

■研究会の実施方針

PMI日本支部の正式な活動として「PMツール研究会」の発足が承認されたわけですが、研究会として始まったばかり

■部会紹介



であり、まずは「実績を残す」ことを考えています。まず今年はメンバー全員で、１つのテーマを徹底的に深堀りします。そして来年から少しずつテーマを増やしていきたいと考えています。

今年の研究活動のテーマは､「標準化推進におけるPMツールの視点での分析」と決定しました。その中に２つのサブテーマをもって活動します。

①標準化しやすいPMツールと、そうではないPMツールの分析と検討

② プロジェクト受注前の意思決定の方法に関するPMツールの活用

定例会議は毎月第４水曜日としていますが、欠席された方へのフォローも行いながら活動を進めます。②は、本年７月のPMI日本フォーラムでの発表を目指しており､①は通年（本年）の研究テーマとしました。

プロジェクトの状況、規模、特徴などにより、実践現場でのPMツールの活用法はさまざまです。PMツールの特徴を学び、深く研究することにより、その使い方や応用分野も無限に広がりテーマが枯渇することはありません。

PMツール研究会は、PMツールを軸として実践での活用方法を研究するとともに、プロジェクトに限らず、プログラムやポートフォリオでの実践的活用、各種PMI標準との関連についても考察します。

■参加者募集

PMツール研究会は、まだ産声を上げたばかりです。メンバーの募集は通年で行っていますので、ご興味のある方はPMI日本支部の会員ページからご応募ください。ご自身でこの研究会をけん引していきたいとお考えの方、スキルアップのために勉強したいとお考えの方、どなたでも歓迎致します。

以上

■関西地区

関西地区運営委員長　浦田 有佳里

関西地区はPMI日本支部がPMI本部のブランチ・モデルとなり、最初のブランチ（地区）として設立されました。今年で地区設立３年目となります。

2009年12月に立ち上げキックオフを実施し、2010年１月には関西地区設立記念セミナーを開催しています。３年目となる関西地区の活動について、全国のPMI日本支部会員の皆さまにお伝えしたいと思います。

■地区のビジョン

設立時には運営委員メンバーにてビジョンやコンセプトに

■部会紹介

ついて考えました。関西地区のビジョンは「関西の特徴を活かしたPMコミュニティーを構築することにより、関西の活性化とプロジェクトマネジメントの価値向上に貢献する」とし、PMの普及と関西地区を元気にする、そんな熱い思いが込められています。

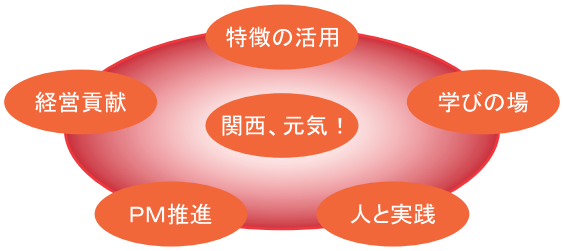
＜関西地区のコンセプト＞

1. 関西の特徴を活かしたイベントを開催する
2. 多様な「学びの場」を提供する
3. 人間関係を重視し、実のある内容を提供する
4. 多様な規模・業種へのPM適用を推進する
5. 経営力の向上に貢献する
6. 関西を元気に！

＜あかねまち＞

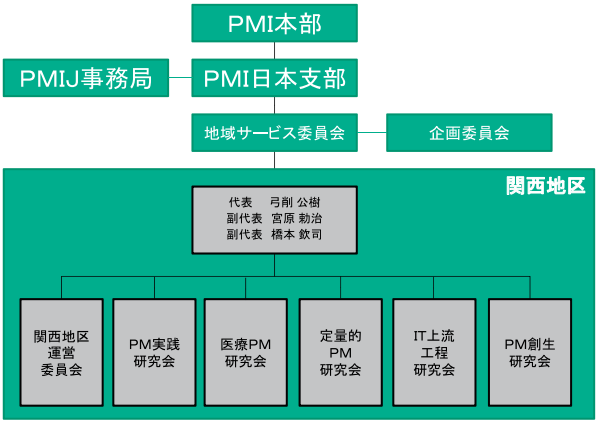
関西地区の学びの場として、淀屋橋の適塾や懐徳堂付近を拠点としています。

夕方空が茜色に染まってから皆が集まり学ぶ場、交流の場として「あかねまち」と呼んでいます。



■地区の体制

関西地区は代表1名、副代表2名の組織となっており、地区の部会として地区の運営やイベントの支援を行う関西地区運営委員会、「あかね塾」と親しみを込めて呼ばれている5つの研究会により構成されています。



■地区のイベント

関西地区では、「地区におけるPMP®の学びの場」としてPDUを発行するイベントを年に6回～10回行っており、学びの場、交流の場として多くのPMPやPM実践者に集まっていただいています。

以下、「あかね教育プログラム」をご紹介します。

★あかねサロン

講師の方にPMに関連する講義をお話しいただくセミナーおよびネットワーキングを行う会です。PMのためになる講義を受け、ネットワーキングは講師や他のPMとの交流を深めます。

★あかね実践工房（事例研究ワークショップ）

プロジェクトマネジメントの事例について講師が発表し、その事例についてグループになってワークを行います。短時間でPMの方々の多くの知恵がそれぞれのグループの模造紙に書き込まれ、最後に全員でシェアします。

★あかね実践工房（体験型ワークショップ）

ケース・スタディーにより実際にプロジェクトの開始から終わりまでを体験していただくプログラムです。昨年は「小惑星探査機」のプロジェクトをグループで検討し進めていただくケースを実施し、好評を得ました。

★あかね道場（PMBOK®セミナープログラム）

PMI日本支部のPMBOK®セミナープログラムを関西地区で開催していただきました。

PM初心者の方、これからPMP®を受験したい方にお勧めのプログラムです。

★あかねカフェ

PMに関しての対話を気軽に行う場という設定で、ワールド・カフェを開催しています。

多くの方と対話したい、さまざまなPMと知り合いたい、PMに興味津々、PMに関して気軽にコミュニケーションしたいといった方まで広くお勧めのイベントです。

★関西地区セミナー

関西地区の研究会の報告を中心としたイベントです。5つの研究会の成果を知っていただくことができます。関西のPM仲間と共にぜひ学んでいただきたいと思います。

■地区の研究会（あかね塾）

関西地区には「あかね塾」と呼ばれている5つの研究会があります。事例を中心に検証を行っている研究会が多く、実践的な成果を追及しています。首都圏をはじめ遠方からの参

■部会紹介

加者も多数いらっしゃいます。

★PM実践研究会

2007年に立ち上がり、関西地区の母体となっている研究会です。

参加メンバーは各自の事例を持ち寄り事例発表を行います。

事例について意見交換（対話）により形式知から暗黙知を増やし、事例から汎用的な知識化を進めています。他にも年度によりテーマを決め、リスクマネジメント、PMコンピテンシーなど継続した学習会を行っています。

★医療PM研究会

医療プロジェクトマネジメントの特徴を探求し、地域連携医療情報システム導入におけるプログラムマネジメントの有用性を検討しています。医療関連情報収集や多業種間での比較検討、海外事例などから医療業界での実践に役立てます。

★定量的PM研究会

定量的データが計測されているPJ事例を収集し、データをプロジェクトマネジメントに利用する上で発生するさまざまな問題点を議論し課題を明確にします。参加メンバーの経験を元に課題に対する対策をノウハウとしてまとめ、研究会の内外で共有を図っています。

★IT上流工程研究会

ITプロジェクト上流工程に関する実践事例を研究し、ビジネス・アナリシスの有効性や上流工程の課題分析、処方箋をまとめています。

★PM創生研究会

日本的プロジェクト成功のためのPMI® 標準（Project, Program, Portfolio Management）の統合的研究を行っています。また、PMの人間性を研究してプロジェクトの成功に寄与するといったことを目標として、PMの人格コンピテンシー向上策や異文化でのPMの人間性に関する事例を研究しています。

■地区の懇親

年に1回～2回程度、地区全体の懇親会を行っています。関西地区の部会メンバーは80名程度居り、多くのPMの交流の場となっています。

■昨年の関西地区報告

昨年の活動実績は以下のようになっています。

★あかねサロン（講演と交流）

- 「変わるリスクマネジメントの役割」
- 「現場力を高める『見える化手法』 プロジェクト・ファシリテーション」

★あかね実践工房（事例ワークショップ）

- 「新ビジネスモデルと連携するSIプロジェクト管理激闘の顛末」
- 「変化を見逃さないリスクマネジメント施策」

★あかね実践工房（体験型ワークショップ）

- 小惑星探査機プロジェクトをテーマにワークショップ

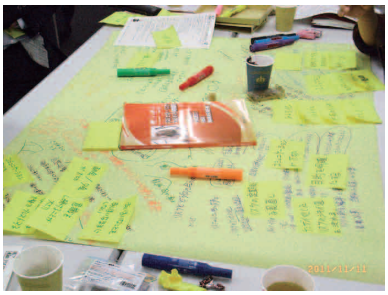
＜あかね実践工房＞

★あかね道場

- PMI日本支部主催のPMBOK® セミナープログラムを関西にて開催

★あかねカフェ

- ワールド・カフェ（テーマ：リスクマネジメント）



＜あかねカフェ＞

Activities ／ 支部活動

■部会紹介

★関西地区セミナー

- “関西プロジェクトマネジメント力の集結“と題し、社団法人日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）細川顧問の講演、関西地区の５研究会発表、PE協会の報告を実施

<関西地区２周年記念セミナー>

■今後の活動

関西地区は今年で３年目、まだまだ試行錯誤の状態ですが、プロジェクトマネジメントの普及に向けて地区メンバーの熱い思いは変わりません。

今年は熱い思いを継続させつつ、イベントの品質や研究会の成果について地区メンバーとディスカッションを重ね、基盤を固めていきたいと考えています。

７月のPMI日本フォーラムにも関西地区の研究会成果発表を行う予定です。

ぜひ、フォーラムにて関西地区成果をご確認ください！

■今年のイベントへのお誘い

地区として基盤を固めつつ、関西地区のPMの皆さまと共に成長していきたいと考えており、今年もさまざまなイベントを開催していきます。

あかねサロン、あかね実践工房、あかねカフェなど随時PMI日本支部のホームページをチェックしてください。

■関西地区の情報発信

関西地区の情報については、PMI日本支部のホームページに関西地区専用のバナーがありますので、そこから入ることができます。ぜひアクセスしてみてください※。

今後も関西地区からの情報発信を進めていきますので、ご注目ください！

■運営委員、研究会メンバー募集

関西地区の運営委員、研究会メンバーも随時募集しています。一緒に関西の活性化に向けてPMコミュニティーに参加してみませんか。

お申し込みはPMI日本支部ホームページ※の「部会活動」をご参照ください。

※４月上旬のホームページ全面リニューアルに伴い、バナー位置は変更になります。

PMI 本部 CoP 活動紹介

■PMI® 標準次期バージョン作成にむけての活動

PMI 日本支部理事　平石 謙治

現在、私はPMI標準次期バージョン作成プロジェクトの一つである「OPM3®（Organizational Project Management Maturity Model）次期バージョン（V3）作成のコア・チーム」に参加していますが、そこで実際に行われている、PMI流プロジェクトの進め方についてご紹介します。

■作業の流れ

PMIがチャーターを作成してボランティアのコア・チームに提示します。これによってプロジェクトの枠組みを決定することになります。このチャーターには次期バージョンの章立ても示されており、章ごとに分担を割り振りました。プロジェクト・マネジャーと副プロジェクト・マネジャーには章の分担はありません。チャーターに示される大日程を満足するようにスケジュールを組むのも各章の担当の仕事です。各章の担当は、まず章のアウトラインを作成し、チームとPMIのレビューを受けます。各章の担当で手に負えないことがあれば、さらなるボランティアの募集をPMIに依頼します。チームはあくまでもボランティアのチームであり、戦略的、方針的事項はPMIが判断します。レビューの結果を反映して、各担当がアウトラインをさらに分解、詳細化して原稿を作成し、チームとPMI、さらにはテクニカル・エディターのレビューを受けます。テクニカル・エディターもボランティアですが、過去の実績をベースにPMIが指名しているようです。PMI標準は「The Chicago Manual of Style」という1,000ページ程のマニュアルに準拠して作成されます。テクニカル・エディターはスタイルだけでなくPMI標準の内容にも精通しています。全ての章が完成するとプロジェクト・マネジャーが全体を統合して、テクニカル・エディターと共にレビューします。レビュー結果を反映した、チームとしての最終バージョンはPMIのレビューと必要な手直しを経て公開ドラフトとして公開されます。

■チームの編成

プロジェクト・マネジャーと副プロジェクト・マネジャーはPMIが選んで依頼します。プロジェクト・マネジャーと副プロジェクト・マネジャーが決まると以降のチーム・ビルドはこの人たちの仕事です。PMIはロースターと呼ばれる人材データベースを持っていて、このデータベースに登録されているボランティアに声をかけて、プロジェクト・マネジャーと副プロジェクト・マネジャーが書類審査やインタビューを行ってコア・チームのメンバーを選びます。

チーム編成では男女、地域、人種等の観点でダイバーシティーを考慮しています。OPM3コア・チームの場合、チーム・メンバーは合計13名（米国５、ヨーロッパ２、アフリカ３、中東１、アジア１、南米１）で、うち女性は５名、東洋系２名、アフリカ系２名の編成です。

プロジェクトの開始にあたっては、原則全員参加のキックオフ・ミーティングを開催します。

コア・チームの活動を支援するボランティアが必要な場合は、PMIにその旨依頼すると、PMIがボランティアの募集を行い、新たなプロジェクトを立ち上げます。

■マネジメント

キックオフ・ミーティング後、バーチャル・プロジェクトとして作業がスタートとします。毎週電話会議を行い、進捗、問題点の確認を行います。進捗確認は大ざっぱで、青、赤、黄レベルの確認です。問題点の確認は、他のタスクからの入力待ちで進まない事項や他の支援が要ること、の確認を中心に行います。新たにボランティアを募集して依頼する作業が発生する場合は、ここで相談します。電話会議だけで全てをカバーするのは難しいので、数カ月に１回程度、全員参加の対面会議を行います。

Activities ／ 支部活動

■PMI本部 CoP活動紹介

■意思決定

組織の上位に位置するアドバイザリー・グループの決定は重く、チームの決定に反することであってもアドバイザリー・グループの決定が優先します。チームだけで意思決定が難しい場合にはアドバイザリー・グループのアドバイスを受けます。

チーム内で意見がまとまらないときは多数決による決定が行われます。

■気付いたこと

◆プロジェクト・マネジャーの役割

具体的にどうするかはプロジェクト・マネジャーの仕事ではなく、具体的なことはチームに任せる姿勢が徹底しています。

手持ちのリソースで対応できないときは、手持ちのリソースで解決しようとするのではなく、何を行うためにどのようなリソースが必要なのか整理してリソースを要求することがプロジェクト・マネジャーの仕事と認識できました（I know what to do, but I do not know how to do.）。

◆異なる意見に対するオープンさ

異なる意見もオープンに受け入れて議論することに慣れています。

◆英語

チームの共通言葉は英語ですが、同じ英語でも国によって随分異なります。（OPM3の場合、ナイジェリアのメンバーがいます。ナイジェリアの公用語は英語だそうですが、我々がよく聞く英語からは随分かけ離れているように感じました）。多様な英語があることには慣れているようで、日本人の英語に対しても一生懸命聞く姿勢を示してくれます。

平石謙治 略歴

1971年　日本電気(株)入社、宇宙関連ミッションクリティカル・システム／ソフトウエアの開発に従事

2002年　日本電気航空宇宙システム(株)に移籍

2006年　ビー・ティー・ジー・インタナショナル設立、PM教育支援、PM組織成熟度向上支援、経営IT化支援等の事業を展開

2009年より　PMI日本支部理事、2011年よりPMI OPM3 V3コアチーム・メンバー

PM Calendar／PMカレンダー

PMI日本支部のイベントならびにPM教育関連セミナーなどの案内です。
詳しくは、PMI日本支部のWebサイトをご参照ください。

■PMI日本支部関連イベント

●PMI日本フォーラム2012

進化するプロジェクトマネジメント
～キーワードは、プログラムとグローバル～

- 日時：７月７日(土)・８日(日)
- 場所：東京（学術総合センター）

●PMI Japan Festa 2012

- 日時：10月13日(土)・14日(日)
- 場所：横浜市（慶應義塾大学　藤原洋記念ホール）

■PMI日本支部主催セミナー

●プロジェクト関係者のためのファシリテーション基礎コース

ファシリテーションの様々な基礎技術を演習形式で体験・習得。自発性の高め方、コミュニケーションを話題に、実際に自らワークショップの企画とコーデネートを体験。

- 日時：４月13日(金)・14日(土)　10：00～17：30
- 場所：東京（PMI日本支部）
- 13 PDU

●５月度 月例セミナー「ソリューション提案におけるBABOK®活用」

ソリューション提案活動にBABOK®をどのようにして活用したらよいのかについて、アイデアを提供。

- 日時：５月10日(木)　18：50～20：50
- 場所：東京（エッサム神田ホール）
- 2 PDU、0.5知識ポイント

●PMスキルアップ教室「Cross-Cultural Communication 中国編」

中国の人々や社会の深層に横たわるものを理解し、彼らと協働していけるためのヒントや知識を学習。

- 日時：５月22日(火)　10：00～18：00
- 場所：東京（PMI日本支部）
- 7 PDU

●PMBOK®セミナー第４版対応　PMI日本支部監修

２日間でPMBOK®ガイド　第４版のすべての章を丁寧に解説。

- 日時：５月26日(土)　９：30～17：30、
  27日(日)　９：30～18：20
- 場所：東京（PMI日本支部）
- 14 PDU

●リスクマネジメント研究会セミナー『現場で使うためのリスクマネジメント』

リスクマネジメント計画、リスク特定、定性的リスク分析、定量的リスク分析、リスク対応計画等を実践でどのように行えば良いかを体験的に学習。

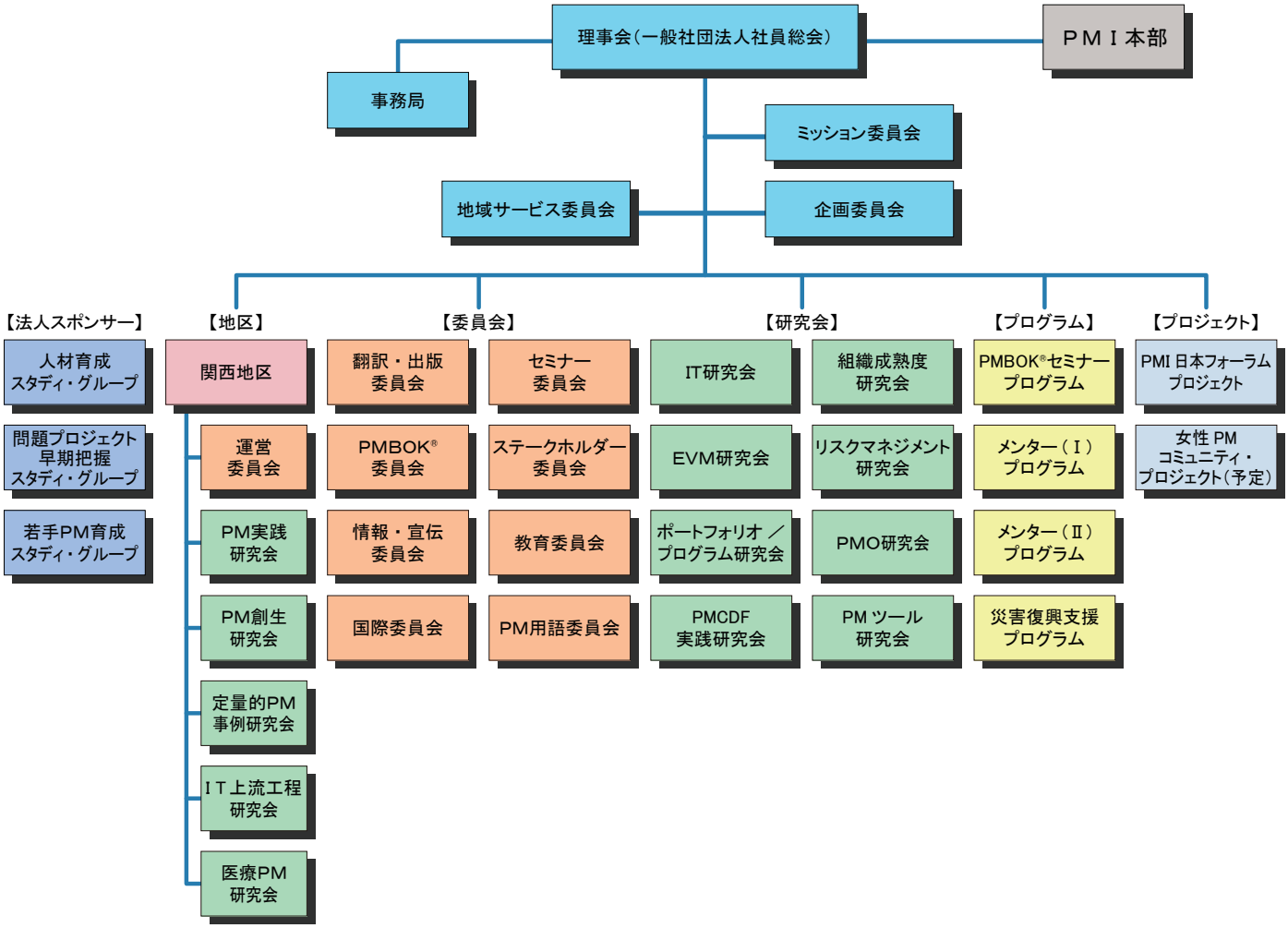
- 日時：６月２日(土)　10：00～17：30
- 場所：東京（PMI日本支部）
- 6 PDU

＊なお、イベント、セミナー、コースなどは、諸般の事情により変更または中止される場合があります。
PMI日本支部ホームページで確認をお願いいたします。
（http://www.pmi-japan.org/event/）

Fact Database ／データベース

PMI日本支部やPMP®資格取得者に関する最新情報をお届けします。

■支部活動 （2012年3月現在）



■理事一覧 （2012年3月1日現在）

会長	：神庭　弘年	（神庭PM研究所）
理事（企画担当）	：平石　謙治	（ビー・ティー・ジー・インタナショナル）
理事（教育担当）	：当麻　哲哉	（慶應義塾大学大学院）
理事（行事担当）	：片江　有利	（株式会社プロシード）
理事（渉外担当）	：杉村　宗泰	（日本マイクロソフト株式会社）
理事（社会貢献担当）	：高橋　正憲	（PMプロ有限会社）
理事（マーケティング担当）	：奥沢　薫	（日本電気株式会社）
理事（会員担当）	：三嶋　良武	（株式会社三菱総合研究所）

理事（広報・宣伝担当）　：端　山　　毅（株式会社NTTデータ）
理事（行事担当）　：松　井　慶　康（株式会社日立インフォメーションアカデミー）
理事（研究担当）　：本　間　利　久（国立大学法人北海道大学大学院）
理事（財政担当）　：加　納　敏　行（財団法人先端建設技術センター）
理事（地域担当）　：渡　辺　善　子（日本アイ・ビー・エム株式会社）
理事（地域担当）　：弓　削　公　樹（ニッセイ情報テクノロジー株式会社）
理事（認定担当）　：福　島　博　文（株式会社建設技術研究所）
理事（コンピテンシー担当）：福　本　伸　昭（株式会社地銀ITソリューション）
理事（コンピテンシー担当）：除　村　健　俊（株式会社リコー）
監事（任期４年）　：大久保　賢吉朗

■最新の会員・資格者情報 （2012年1月末現在）

会員数		資格保有者数				
		PMP®		PMI-SP®	PMI-RMP®	PgMP®
PMI本部	日本支部	世界全体	日本在住	日本在住	日本在住	日本在住
377,589人	3,085人	471,437人	30,107人	1人	1人	0人

■法人スポンサーおよびアカデミック・スポンサー一覧 （順不同）

- 株式会社ジャステック
- TIS株式会社
- 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 株式会社NSD
- 株式会社プロシード
- 株式会社インテック
- キヤノンITソリューションズ株式会社
- NTTコムウェア株式会社
- 日本電気株式会社
- 株式会社ジェーエムエーシステムズ
- アイアンドエルソフトウェア株式会社
- 株式会社NTTデータ
- 株式会社電通国際情報サービス
- 日本マイクロソフト株式会社
- プラネット株式会社
- 株式会社建設技術研究所
- 株式会社テクノファ
- 日本ユニカシステムズ株式会社
- 株式会社クレスコ
- トランスコスモス株式会社
- ラーニング・ツリー・インターナショナル株式会社
- 日本アイビーエム・ソリューション・サービス株式会社
- 日本ヒューレット・パッカード株式会社
- 日本アイ・ビー・エム人財ソリューション株式会社
- 株式会社アイ・ティー・ワン
- 株式会社オープン・システムズ・テクノロジー
- コンピューターサイエンス株式会社
- 株式会社タリアセンコンサルティング
- ティーディーシーソフトウェアエンジニアリング株式会社
- 富士ゼロックス情報システム株式会社
- 株式会社大塚商会
- 株式会社翔泳社
- 日本プロセス株式会社
- 株式会社NTTデータ関西
- 日本ユニシス株式会社
- 株式会社JALインフォテック
- Kepner-Tregoe Japan, LLC.
- 日本ビジネスコンピューター株式会社

Fact Database ／ データベース

- 株式会社富士ゼロックス総合教育研究所
- 日本アイ・ビー・エム・ビズインテック株式会社
- 株式会社アイテック
- 株式会社エヌ・ティ・ティ・データ・フロンティア
- 株式会社日立インフォメーションアカデミー
- 情報技術開発株式会社
- 富士ゼロックス株式会社
- アイシンク株式会社
- ITエンジニアリング株式会社
- 三菱総研DCS株式会社
- ソニー株式会社
- 東芝テック株式会社
- 三菱スペース・ソフトウエア株式会社
- 株式会社三菱総合研究所
- NTTデータ・アイ株式会社
- NTTデータシステム技術株式会社
- 新日鉄ソリューションズ株式会社
- 株式会社日立ソリューションズ
- 日本自動化開発株式会社
- 株式会社NTTデータCCS
- 日揮株式会社
- 株式会社野村総合研究所
- 株式会社アイ・ティ・イノベーション
- NECネクサソリューションズ株式会社
- 株式会社三技協
- 株式会社JSOL
- NECネッツエスアイ株式会社
- リコーITソリューションズ株式会社
- ニッセイ情報テクノロジー株式会社
- CA Technologies
- 富士ゼロックス大阪株式会社
- 株式会社RINET
- 株式会社リコー
- 株式会社システム情報
- 株式会社ヘッドストロング・ジャパン
- ソニーグローバルソリューションズ株式会社
- 住友電工情報システム株式会社
- 株式会社エヌ・ティ・ティ・データ・ユニバーシティ
- 株式会社マネジメントソリューションズ
- トッパンエムアンドアイ株式会社
- PMアソシエイツ株式会社
- 株式会社日立製作所
- 株式会社ヴィクサス
- 株式会社システムインテグレータ
- 日本ビジネスシステムズ株式会社
- コベルコシステム株式会社
- 日本電子計算株式会社
- 富士電機株式会社
- 株式会社日立情報システムズ
- セコムトラストシステムズ株式会社
- 株式会社神戸製鋼所
- 日本証券テクノロジー株式会社
- 株式会社リクルート
- クオリカ株式会社
- 産業技術大学院大学
- 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科
- サイバー大学
- 芝浦工業大学
- 株式会社エクサ
- IIL
- ラックホールディングス株式会社
- ピーエムグローバル株式会社
- ニューソン株式会社
- 三菱電機株式会社
- TAC株式会社
- 金沢工業大学
- 日本情報通信株式会社
- 株式会社ビジネス・ブレークスルー
- 株式会社クローバワークス
- 九州大学大学院 芸術工学府 デザインストラテジー専攻
- 武蔵大学経済学部 松島研究室
- 広島修道大学 経済科学部
- 北海道大学 大学院情報科学研究科

110スポンサー（2012年3月現在）

Editor's Note ／ 編集後記

執筆者の皆さまへ。お忙しいところ、ご協力いただきありがとうございました。

■本年最初のビッグイベントとして２月３日(金)に開催した、Dr.ハロルド・カーズナー氏による特別講演では、PMI日本支部セミナールームに満員の聴講者にお越しいただきました。カーズナー氏には、KPIやダッシュボードについて熱く語っていただき大好評のうちにセミナーを終えることができました。

■本号の講演報告としては、まず、平成24年２月10日(金)に慶応義塾大学日吉キャンパス 協生館藤原洋記念ホールにて開催された「*it*SMF Japan ＆ PMI Japan 共催シンポジウム」について、講演全３編とパネルディスカッションの概要をボランティア記者からご紹介いただきました。他団体との共催イベントの開催にあたっては、いろいろな苦労もありますが、おかげさまで皆さまに満足いただき実りのあるシンポジウムとなりました。

■また、本年２月５日にはインドのプネで「Pune Deccan India Chapter インターナショナル・カンファレンス」が開催されました。参加したPMI日本支部 杉村理事と事務局田中次長による概要報告を掲載いたしました。

■月例セミナーは、いずれも好評をいただいた昨年12月、本年１月、２月の計３回の様子について、その概要をご報告いたしました。

■部会その他活動の報告として、今年から新しく活動開始した「PMツール研究会」を村上竜一代表から、設立３年目を迎えた「関西地区」の活動状況を浦田有佳里運営委員長から、PMI本部におけるOPM3®次期バージョン作成コア・チームの状況をPMI日本支部 平石謙治理事より紹介いただきました。

■今年も一年、PMI日本支部をどうぞよろしくお願いいたします。

ニューズレター編集担当から読者の皆様へお願い

■記事・体験記を募集しています。

事務局では、皆さまからの書評、論評、トピックス、セミナー受講リポート、プロジェクト体験記、新しく得られた知識・教訓など、随時募集しています。記事として、PMI日本支部事務局宛てにお送りください。

■あなたの合格体験記をニューズレターに投稿しませんか？

皆さまからのPMP®／CAPM®認定試験合格体験記を募集しています。受験の動機・経緯、合格して気づいたこと、これから受験される方へのアドバイスなど、PMI日本支部事務局宛てにお送りください。

【記事、体験記、広告の問い合わせ先】

お問い合わせは、PMI日本支部事務局まで電子メールでお寄せください。よろしくお願いいたします。

PMI日本支部ニューズレター Vol.50　2012年3月発行

編集・発行：PMI日本支部 事務局
〒103-0008　東京都中央区日本橋中洲3-15　センタービル3階
TEL：03-5847-7301　　FAX：03-3664-9833
E-mail：info@pmi-japan.org
ホームページ：http://www.pmi-japan.org/

（非売品）